

野崎鐵文著

黃檗之由来

知足軒藏版

2004
4
2004

野崎鐵文著

黃鐘之音

知是軒藏版



例言

一、本書想を構へて幾星霜を経、其間我が宗のため
に諸方に講説する所、多く本書は其の一部分たら
ざるはなし、之れ偏へに取材廣からず造詣遍ねか
らざるの致す所、深く省みて慙愧に耐へざる所也。
一、本書は嘗て予が山陰毎日新聞紙上に連載せる者
を骨子として立案し、職務の餘暇に執筆校正せし
者なれば、素より粗漏杜撰の誹りを免かれず、幸
に博雅の慈教を俟て、逐次その缺を補はんを欲す。
一、本書の體裁及び總振假名等は凡へて予の劇務中
到底其の任を果す能はず、其の全部を舉げて之を

角倉秀道氏に委囑したり、若し錯誤あらば幸ひに讀者の寛假を仰く。

一、本書の内容は最初努めて豊富を期せしかども、奈何せん塵務蝟集の爲めに初志を果さず、他日閑を得ば再び想構詳密を期せんを欲す、讀者請ふ之を諒せよ。

一、本書の出版に就ては吾が辱友星野直翁、淺野眞成兩禪師が劇務の餘暇を割愛して多大の同情と高教を賜り、亦角倉秀道氏は種々熱誠を捧げて指導を與へられたり、予か三氏に負ふ所特に多し、茲に記して深く感謝の意を表す。

自序

八旬の高齡鑠鑠として能く壯者を凌ぐの氣概を抱き、靜かに我は是れ支那の老比丘緣に従ひ化に應じて東土に赴くを朗吟し、萬里の鵬程を衝破して得々として日本に來り、三百年來既墜の禪風を簸揚して心靈の活火を傳へ千古の崇拜を負ひ、最後に帝王の貴きすら、國師は日本の寶なり命若し替るものならば朕が躬を以て之に代らんを、絶大の尊崇を享け給へる、吾が祖隱元の禪要はるの史蹟を徵すれば淵源する所頗る遠く、其宗義とする禪海は澎湃として東亞幾萬の精神界を浸潤し來り、而して我邦に於ける

承應寛文の頃、一條の烏藤道に殉ずる熱誠を懷き、日本の國土に航海せる我祖隱元國師の禪要は最も幽玄にして而も高級の智識を有するものにあらざれば、容易にその門庭を窺ふの至難なるを慨し、其高尙の教理を俗談平話に該羅し以て聊か吾宗の法要を明さんご欲す。此故に何人も一度この書を繙かば、一旦豁然として我禪門の要義を悟了するを得んか。是書題して「黄檗之由來」といふご雖も、其氣脉の通ずる所、遠く臨濟曹洞の二禪法をも包容し、以て聊か末覺を諭さんご欲す。蓋し吾宗禪法の存する所、東土五家七宗の禪要も亦繋てこの機にあればなり、

此故に讀者幸に坦懐の雅量を以てこの書を讀破し、我宗義の大綱を知ること同時に併せて禪の何たるを識るを得ば著者の幸之に過ぎざるなり。

明治四十五年二月上澣黄檗山の寓居に於て

著者誌

黄檗之由來目次

第一章	黄檗宗の發端	一
第二章	黄檗宗祖隱元國師の略歴	一五
一	國師の御降誕及出家の願望	一五
二	國師の得法及日本への來朝	三一
三	黄檗宗の開創及國師の御遷化	四〇
第三章	宗要大意	五二
第四章	參禪の要路	六六
第五章	安心の秘訣	八六
目次終		

黄檗之由來

野崎鐵文著

第一章

黄檗宗の發端

黄檗宗の由來は、其紀原をたづぬれば甚だ遼遠な譯で、今より三千八百年前、すなはち釋尊が王舍城にまうす國にある、靈鷲山と稱する山上にたいて、多くの聽衆のために説法せられたとき、聽衆の中に一人の信者が、金波羅華と稱する花をもつて、釋尊の御前に跪き、その花をさへげて欽で白すには、

何卒この華をもつて、我等大衆のために説法してくださいとの懇請により、釋尊はこの花を拈提て無言にて一場の御説法があつたのである。所て是まで釋尊の御説法といふものは、丁度無智なるものに教訓を加へるやうに、言舌上の説法であるから、始終の説法にき、狎されたる大衆ごもは、この變則た説法を聞いて、たゞ釋尊の顔を仰て茫然として居たこと云ふことである。ソコデ釋尊の御弟子の中に稀にうの人ありと稱せられたる、頭陀第一の迦葉尊者ごまうすが、獨り大衆中にあつて破顔微笑なされたのである。するご釋尊は早くこれを變じたまひて、我に正

法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、これを摩訶迦葉に附囑ふこの御勅諭がくだつたのである。是が抑吾が黃檗宗の唯一の骨子たる教外別傳の心印ごまうすのであります。否この正法眼藏涅槃の法門がわが宗の骨子であるばかりでなく、日本の禪三宗は勿論、たよる世界にわたける禪宗といふ禪宗はみな此の教外別傳の羅針盤の上に立てをるのであります。ソコデ我が黃檗宗の印證嫡傳ごまうすものは、本師釋尊より迦葉尊者に傳へ、迦葉尊者より阿難に、阿難より商那和修尊者につたうご云ふ風で、展轉この心印を相承て、遂に二十八祖たる菩提達磨大師にい

たつて禪機を賈して東漸り、支那に來りてこの禪宗を弘通られたのであるから、之を唐土にたいしては達摩大師を禪宗の元祖とするのであります。うれから大師より慧可か、僧璨か、道信か、いふ御方を經て、弘忍禪師と言ふにいたり、弘忍禪師の門下に大鑑慧能禪師といふのこ、大通神秀禪師といふ崇高偉大なる豪傑がでましたので、この御兩名の禪師は、達摩元祖の滅後に及で、たのく一派を開かれると云ふ次第。こゝに能く注意をして貰ひたいことは、斯吾が禪宗にたいしては後世に五家七宗と申して澤山の分派ができたのであるが、之を概括ていふて

見れば、その歸著するところは南宗と北宗との二つに過ぎないのである。抑この南宗といふのは支那の南方の地にもつばら弘通たから之を南宗と云ふのであるし、又北宗といふのは北方の地方に行はれたるゆる之を北宗とまうすのである。これに又南頓北漸とまうすところがあるが、此南頓と云ふは、大鑑慧能禪師の南宗に名けたるもので、元來南宗派の方はその教義が名相言句にかゝはらず、専ら以心傳心の旨を領得して頓に佛性を悟るの益をうるがゆるに斯は名けたるものでありますし、亦北宗の方は、潜行密修もつばら文字上の教義を逐て因を修して果を證る

の階級をたつるがゆゑに、之を北漸の宗と云ふのである。之を要するに我が單傳の教には固より頓とん漸ぜんか云ふが如き閑名目の存在すべき筈なく、唯之を修する人の根機の利鈍につきて名くるのみであるから互に之を誹謗するが如きここは大なる謬見びやうけんといはなければなりませぬ。

偕まて南北兩派の御相談はザツトこの位にいたして措たて、本にかへつて謂いてみれば、達摩大師より第六祖そに丁ある、慧能えい禪師ぜんの門下に二流の偉人を出したのであるが、一を南嶽なんがく懷讓ゑいじやう禪師ぜんと云ひ、一を青原せいげん行思ぎし禪師ぜんといふので、共に機鋒きほうの峻峻しゅんしゅんを以てきこゆてを

る。夫それから又南嶽なんがく懷讓ゑいじやう禪師ぜんの下もとに、馬祖ばそ道一だういつ禪師ぜんあり、また馬祖ばそ道一だういつの門下かどに、百丈ひやくぢやう懷海ゑいかいあり、百丈ひやくぢやう懷海ゑいかいの下もとに、黃檗わうはく希運きうんといふがある。この御方みかたが正しく我が黃檗わうはく宗しゆの元祖げんそで、此御方こゝみかたは寔まことに不世出ふせしゆつの大器たいきを懐いだき、機鋒きほう峻峻しゅんしゅん大たいにわが法幢ほふぢやうを興隆かうりゆうせられたので、唐たうの宣宗せんしゆ皇帝ていによびるの當時たうじの宰相さいしやうたる斐休はいしゆ等の如ごとき大人物だいにんぶつを接得せつとくして大たいにうの感化かんかを揚げられたるが如ごとき、うの人物にんぶつの崇高かうたう偉大ゐたいこそ、うの心情しんじやうの純潔じゆんけつ靈妙れいめうなるは、今いまより推測すいそくするに難かたからぬわけであります、ソユデ元來げんらい支那しなの黃檗わうはくと申まうすは唐たうの太宗たいしゆ皇帝ていのごきに、正幹しやうかん禪師ぜんといふ大徳たいとくがあつたが、此御方こゝみかたが

今いまの福建城ふくけんじやうを距さきること二十里ににして、安路驛あんろと云ふ
ところところに、香爐峰かうろほうといふがあつた、斯峰このかみねは天然てんねんの風
光くわうはなはだ佳絶きせつにして、仰あやげば嵯峨さあがたる山岳さんかく重疊じゆうたうし、
俯ふすれば河水岩かすゐいはに激げきして駛走しすうするなご、この濶大くわくだいな
る光景あうきまは、眞まことに參禪さんぜん辨道べんどうに適あてする勝地しょうちたるこいふ所
から、此正幹禪師このしやうかんぜんじが唐たうの貞元ていげん五年ごといふに、始はじめめて
この勝地しょうちを御開ごひらきになつて、建徳寺けんとくじと申まうす或は般若堂
壯大さうだいなる道場だうぢやうを建設けんせつせられ、此所このところにて四海しかいの雲衲うんさつを
攝得しやくとくせられたのであります。

夫このより後のち、日本にほんの黃檗わうはくの始祖しそたる隱元國師いんげんこくしの御誕ごたん
生じやう在ざいせらるゝ三年前さんねんぜんに、此建徳寺このけんとくじに天子てんしより勅額ちくがくを

賜たまはりて、山號さんごうを黃檗わうはくと云ひ、寺號じごうを萬福寺まんぷくじと改稱かいためた
のであります。尙なほ此山號このさんごうを黃檗わうはくと稱しょうする譯わけは、此香
爐峰中このかうろうほうちゆうに「キワダ」と稱しょうする樹きの繁茂はんまいせるを以もつて斯かは名な
たるものにて、「キワダ」は黃檗わうはくと訓なむを以もつて全まく植物しよくぶつ
の名なによつて斯かは名なけたるものであります。夫このより
後のち世せいに到いたりすなはち明みんの永明皇帝えいめいみやうてい永歷八年えいれきはちねん日本にほんは後
光明天皇承應三年くわうみやうてんしやうおうさんに隱元國師いんげんこくしが我日本われにほんの招聘せうへいに應おこじ
て來朝こらしごき、今いまの山城やましろの宇治うぢに黃檗山萬福寺わうはくさんまんぷくじを開ひら
創つれて、新あらたに宗旨しゆじを御開ごひらきになるに付つき、支那黃檗山
の原型げんがたに擬なし、この名稱めいしやうを襲用しゆうようで直たにこの山號さんごうを一
宗しゆの稱呼しょうこさせられたのである、かゝることは古來いにしへよ

り決してその例に乏しからぬことで、今ごろみは一例を擧て見ますれば、昔支那相承の第五祖弘忍大師の嗣法たる第六祖大鑑慧能禪師が、曹溪山といふところに居られましたる故直にその所住の名をもつて人名に用ひてこれを曹溪大師と云ふが如き、また曹洞宗と申しまするのでも六祖慧能の所住を曹溪山といひ、第三十八祖良价禪師の所住を洞山と名くるので、その六祖の曹溪の曹の字と、洞山の洞の字とを踏用て曹洞宗となづけけたるが如きものにて、今もその如く我が開祖隱元國師は原支那福清縣の黃檗山に瑞世して職を董されたる因もあれば、旁もつて郷

里の黃檗を慕ふの念より斯は山名を以て我が宗の名義に改稱したのであります。抑我が開祖隱元國師が、日本に渡來になりましたのは後光明天皇の承應三年のことで、其ころは曹洞臨濟は申すに及ばず、諸宗の佛法が痛く衰弱を呈し、僧侶は俗化し、信仰はたころへ、寺觀は没落いたし、世を救ひ人を誨ゆるの僧侶の中より、却て幾多の害毒を社會に流すに至りました。但だろの中にも二三の伎倆家なきにあらざれども、之に仗て一班僧風の刷新を企て得たりといふことは出来なかつたのです。然るに我開祖隱元國師は、最も豁達なる眼識と銳利

なる靈腕れいわんごに加ふるに徳一世とくいっせいにたかく、大機大用だいぎだいようを帯びさせられ、我が日本にっぽんに來朝らいてういたされて、各佛敎たつふつぎょうの眞風しんふうがいたく衰へて有るか無きの荒廢くわうはいに陥り、禪宗ぜんじゆうの面目めんもくは失却しつじやくしてうの佛ぶつだになきを慨がいせられ、眞風しんふうを既倒きたうにさへ祖道そだうを中興ちゆうきゆうするを念ねんこいたされましたので、餘宗よじゆうは兎うに角かくわが禪宗ぜんじゆうにたきましては、開祖かいその御來朝ごらいてうよりこのかた大たいに紀綱ききやうが振張ふんちやういたし、諸方しよほうの叢林そうりんは諍しやうふてこれを標榜ていぼうこいたし、頓とんに禪門ぜんもんの化風けふうは一新いっしんするにいたりました。其中ちゆうちゆう開祖かいそに法ほふを相承しやうじゆうして門下生もんげしやうたることを誓ちかれたる人々ひとびとは其數そのかず決して尠すくなないのであるが、其中ちゆうちゆう支那しなご

日本にっぽんこの兩國りやうこくで、宗祖しゆうその門もんに依よて得度とくどせられたる御弟子ごでしの中で廿三人にじさんご云い御高足ごかうそくが輩出はいしゅつせられました、是こゝ皆英邁けいまいにして徳一世とくいっせいに高たかき龍象りゆうじやうばかりであります。其中ちゆうちゆう當時たうじ殊しゆに木庵もくあん即すなはち非龍溪ひりゆうけいの三師さんしを稱しょうして天下てんかの三名匠めいしやうご號ごうして居ゐたのであります。それより師資相承ししそしやうじゆうして法孫ほふそんの黃檗わうはくに住すませらるゝこと今日こんにちに至いたるまで十四代じゆうしだいに及およんでをります。この中ちゆう開祖かいそより黃檗わうはく十三代じゆうさんだいの竺庵しゆくあん禪師ぜんしごいふに至いたるまで、支那しな福建省ふくけんしやうの黃檗わうはくより渡來わたらいせられたる支那僧しなそうのみが住職ぢゆうしやくせられて居ゐります、夫またより又また十四代じゆうしだい龍統りゆうとう禪師ぜんしごいふ御方ごかたより廿一代にじだい大成たいちゆう禪師ぜんしごいふにいたるまでは、日清兩國にっしやうりゆうこくの法ほふ

孫によつて混住せられて居ります。夫より以後則ち黄檗二十二代格宗和尚と云ふ御方よりこのかた日本の法孫のみが住職いたすことに成りまして、其より以來明治維新に至るまで、凡る百年間ばかりといふものは、支那の黄檗山との交通は自然疎遠となり、本邦人も外國との交際は國禁を以て航海を遮断せられて居たのであるから、現今にいたるまで矢張本邦の人をもつて黄檗山の職を董してたるのであります。先づザツト黄檗宗の傳來はこの位に致してわいて次

第二章 黄檗宗祖隱元國師の略歴

一、禪師の御降誕及出家の願望

ここに我が開祖隱元禪師の御略傳を叙するに先だつて、一寸注意をいたして置きたい譯は、凡る何宗の開祖の傳記をよむで見ても、或は觀音薩埵の權化であるとか、又は八幡大菩薩の御垂迹であるとか、いや不動明王さまの御變化であるとか、種々さまざまなることをうの人の事蹟の上に附加して特更に人の神怪にするこののみ努めてをる人もあるやうに見受て居るが、私はすべて何宗の開祖を問はず、一

且人格をうけて此世に出現されたる以上は、その人に超自然的の怪力があつて、することなすことが皆我々ごもの意表にいで、不可思議なる靈力の存在するものごは思はぬのである、否思はぬのみならず、かゝる人文開發の時に於て、その開祖と稱する人々を神異怪靈にするの結果は、その著眼點がみな悉く迷信的に陥り、却て高大なる人物をして毫も光輝を放つことのできぬのを悲むのである。併し一宗を御開きなされて千古の師表と仰がる人々は其人物の絶凡崇高なる、その心情の皎潔優美なる、その品性の森嚴綿密なることは固より吾々ご日を同ふして語る

ことではできぬのである。否この點から云へば、諸宗の開祖は確かにわれ々如き尋常一様なる凡輩ごは其撰を異にして居ること言ても宜からうと思ふ、そのんなれば我宗の開山國師は如何なる人格であるかご云ふに、諸宗の如く薬師如来の應現でもなければ、常行菩薩の再誕でもなき純然たる人間であるのです。併しその人物の絶倫なる、その智識の深遠高邁なる、その徳の靈妙なる、其足跡の印するところ、支那日本兩國仰ひて以てその感化に浴するもの、帝王駕を任せ百官膝を屈し、諸民雲の如くあつまり、上下驕然ごしてその教化に歸したる事蹟を見ても、我が

日本にをける高僧中稀にみる所の最大偉人であることは、今更まうすまでもなからふと思ひます。成程むかし我が國にをける鎌倉時代には、非常なる高僧が出で、一宗を御開きに相なり、盛名を萬世にのこし、德澤を庶民に施されたる人々も澤山あるので、決して其人に乏しからざることであります。併し、ろの中にも吾が開山國師の如く教化を支那日本の兩國に傳播し、德澤を四海にほごこし、法のために老躬を厭はず、遙々我國に來て禪宗の化風がいたく衰へて、萎靡不振の状態に瀕して居るのを救濟し、ろして遂に宗運を挽回されたる人は獨り古來より我が

開山國師を措いて他にみることは出來ぬといつても、敢て溢美の言ではなからふと思ひます。古人も創業は易し守成は難しと申されてをるが、諸宗の開祖たちが一宗を御開きなされたる時代は丁度創業の時期であるから、容易に一宗もひらけたのであらふが、我が開山國師の御出世は、ろの時恰も澆末守成のときであるから、中々容易なここでは無かつたので、其御艱難といふたら到底吾々ごもの豫想外であつたのであります。因て私はこの宗教上の鉅人の史蹟が、永く世間に忘られてをるのを慨して、是よりぼつばつ興味あるこの最大偉人の風采を御紹介まうしあげ

やふと思ふのであります。
抑我開山國師は、今を去ること二百五十年前、則ち支那は大明の世、神宗皇帝萬曆二十年十一月四日の御誕生で、すなはち我日本の年號にて謂ば、後陽成天皇文祿元年にて、支那の國は福州府福清縣東林と云ふ村里の御出生で、國師の御父君を德龍とまうし、御母君を龔氏の方と稱し、御夫妻ともに御賢徳があつたのであるが、何せよ後々には一宗を御開きありばさる様なる一大偉人の御生母であるから、至て博愛仁慈の御心に富ませ玉ひ、常に三寶に歸依して、貧窮にして飢たるものを視たまふにも、恒に同

情を表せらるご言ふやうなることであつた。偕て國師が六歳のごきに、御父君の德龍公と申すは朝庭の御官命により遠く楚といふ國に往かれることになつた、所が愈御父君が楚の國に旅行れてより、絶て久しく郷里へは御音信がないのであるから、至孝なる國師の御煩悶は言はん方なく、徒ら母君と共に日夜悲歎の涙にくれたまひて居りました。斯てあるべきにあらざれば、國師が九歳の春郷里の學校に入らせたまひて、日夜孜孜として御學問を御勉強ありばされて居りましたが、唯さへ天稟英邁の資であるのに、熱心をかけての御勉強であるから殊のほか御發達こ

いふ次第。

明れば國師御年十六歳の夏、ある時御同窓の友二三を語ひたまひて、庭前を散策いたされて居りまするこ、不圖天を仰ぎみて歎して宣ふには、如何なれば斯く天體の星月が毎夜循環してまた違ふことなきや、よし／＼此理は尋常の人はよも知らじ、仙佛の道にあらざれば明めがたしこ、遂に欣然こして佛道を慕ふの念ができたのである。國師は是より出家得脱の志急にして世上の榮華を見給ふにも凡て夢幻の觀に住せられ、唯出家得脱の人に値給へば、佛道修行のここのみ御尋ね遊ばして居たのであります。さ

て國師も漸く御壯年に達したまひて本年二十歳になり玉へば、ある時母君は國師に妻を娶さんことを仰せられますと、國師は其よしを聞きしめて宣ふには、夫れ人界に生るれば親の恩より重きはなしこころ承はりぬ、今吾が父君は遠く楚の國に遊びたまひて未だ還り給はぬに、如何て子こして妻をもつべきことやある、吾が願は然ここにあらじ、只ひこへに父を尋ね参らせて後ころ兎に角母の仰せに従ひまつらんご宣へば、母君もいさろ道理あることろご諾ひ玉へば、國師の御歡び斜めならず、是より我樓馴れし古郷を後に見て、先づ豫章といふ所に詣り、また金陵

ご云ふに龔泉宇といへる人に遇ひたまひて、父をた
 づぬる由を告げ給へば、龔泉宇の白さるゝには、御
 尊前の孝心にて父君を尋ねまらするは最も畏く殊
 勝なれども、父君のたはする所は旅程はるか楚の國
 のここなれば、容易く父をたづね参らするここは覺
 束なかるべし、然らば寧ろこれより古郷にかへりて、
 母君に奉仕ころ却て孝順なれと勧めしが、至孝なる
 國師はイヒカナ之を諾ひたまはず、夫より父君を尋
 ぬるため諸方を周流せらるゝここ殆ご三年の春秋を
 過して居れるこ、折ふし便船あつて南海の普陀洛山
 に至らんとして竊に憶ひたまうやふ、此山は觀音大

士應現のこころなり、若し薩埵の冥助によつて必ず
 わが父を尋ぬる志願を成就するこどもやあらんこ、
 心中潜かに期し給ひて便船に托して始めてこの山に
 到らるゝこ、忽ち佛境の殊勝なるこは到底人間世
 界の比ではないのであるから、國師の感慨うたゝ喻
 ふるに物なく、遂に忽然として凡念氷の如くに釋け
 給へり、うれより此山内なる潮音洞と云ふに滞在し、
 茶頭といふ役を御勤めにあひなり、日々茶を煎じて
 萬人の衆僧に給仕いたされて、少しも其勞苦を厭は
 るゝここがないのであるから、参詣の僧俗が之を見
 て嘆じて言ひますには、是れ眞に菩薩の應現であら

ふと申して居たのであります。國師の至孝なる父を
たづぬる一念より、身命を賭けてもかゝる苦役に従
ひたまふこと眞に吾々ごもの龜鑑とせねばならぬこ
とであります。

諸其年も暮ぬれども、國師未だ普陀洛山に寄寓せ
られて潜に憶念たまふやう、此處は菩薩靈驗の地な
り、苟も梵行を精修するのものにあらざれば曷ぞ吾
が師とするに足らんやと、則ち境中の茶山と云ふこ
ころに御出になりまして祇園和上といふ御方を御尋
ねにならふとして飢飽嶺と云ふ山中を通過と、忽ち
何所ともなく、獨りの龐眉鶴髮なる老僧が顯はれて、

懐中より縲を取りいだして國師に授けられたが國師
は之を拜授て嘗め給へば、忽ち滿腹せられたのであ
る。うここで國師は頭を擡げて禮拜せらるゝ彼の老
僧は忽然として失せました。うここで國師の思ひたま
ふには、是れ必ず神僧ならんこと。是れ春古郷に歸りて
母君に省勤たまへば、母君は國師に訣別たまひしよ
り、既に四年を経れば、今生ふたゝび相視ること覺
束なけんと思慮にかけ給ひし折こて、天より降り來
るかご自ら欣舞にたへず共に歡喜の眉を開き給ひぬ。
斯て國師御年二十五歳になり給ひてつらく思ひ
給ふやう、世間は則ち有爲の娛樂を以て父母に孝養

をなす、これ眞の孝道にはあらず、我身出家して父
 母を菩提の彼岸に至らしめてこそ眞の孝行と云
 ふべけれ、出でや是より再び南海の普陀洛山に往き、
 出家の願を遂げばやと、其旨を母君につげられます
 ると、母君は之を許さずして謂はるゝやう、吾れ老
 たり命根旦夕に迫れり、吾れ世を辭て後出家せんこ
 と未だ晩からずと、卒に母君の命に従はれて、家居
 して清素の業を修めらるゝ云ふ次第。
 斯して居らるゝと殆んど一年、國師潛に想へら
 く、早や年もすでに二十六歳になりぬれども未だ出
 家の縁いたらず、かれこれと遮ぎられしころ無念な

れ、此たびこり疾く出家せんものをと、竊に節を忍
 び出で給ひてうの路途に自ら憶念し給ふには、此た
 び母の一期を看こゝけて後出家せんことは本意なり、
 去りながら人は老少不定とさきけば萬一母に先んして
 死して夙願に違はゝ、吾れ遂に佛道に入るこゝ叶ふ
 まじ、二親をも衆生をも度脱こゝ能はず、則ち母も
 我が得度の志を障し業因となり玉ふべし、縦ひ母の
 情に順て孝養をつこむるこゝも、只世間有爲の行ひに
 過ぐるこゝなけん、出家して律身成道せば、始めて
 四恩三有に報答すべし、一旦有漏の迷情には負くこ
 雖も、畢竟眞實の道に適ふべし、是すなはち眞の孝

行なりと、遂に普陀洛山にいたらんとして、福寧州
といふところに到らんとして中途にたいて盜賊に會
ひ給ひ行囊を空ふせられて遂に普陀洛山にゆくこと
能はず、悵然としてまた再び家に歸らるゝと云ふ始
末。

うこで又止むなく家居して畊樵の業をつこめられ
て母君を奉養し給ふこといよく厚くせられたので
ある。國師嘗て想ひ給ふやう、吾れ夙に菩提心を發
して出離をもこむと雖も、所詮今生にては出家の緣
成就せざるにやと落涙せらるゝこと之を久ふしてあ
りしが。或日のここに、石竹山と云ふ山にある九仙

觀と云ふに御登山に相なり、しばしの間祈念し給ふ
に、深山岩涯の中にあうんで三人の異僧の大なる磐
石の上に坐して西瓜を剖て四辨さなし、國師が來ら
るゝのを見て、欣然として一辯をあたへ相さもに之
を嘗めけると夢み給ひ神氣恍忽として卒に寤めにけ
る。四沙門の道果われ今其の一に預かれり、吾が願
ひ必ず成就すべしと、潜に自ら忻び給ひける。

二、禪師の得法及日本への來朝

偕てこの冬にいたりて、國師の御母君は御老病に
て遂にむなしくならせ給ひぬれば、國師の慟哭喩ふ
るにもものなく、世禮に依りて、黄檗の名徳を家に請

し母君のために御追福を營ませらるれば、一郷これが爲めに國師の孝情のいたれるを感じてこもにうの哀を助けたといふことでもあります。うこで國師は豫ての御志願の如く出家をせんものご思ひ給ひて、印林寺ご云ふ御寺にて黃檗の紫衣の大徳たる鑑源禪師といふに御會にあひなり、其所にて御弟子の禮を結られ、自ら誓ていはれるには、今吾れこの所にて薙髮染衣することを得たり、若し宿願の如く梵行を精修し、法門を興隆することを得ずんば生ながら泥黎に陥らんご仰せられ、其より天下のあらゆる諸善知識を歴訪して備に辛酸をなされたのであります。こ

の冬海口の瑞峰寺ご云に道弘法師に従て楞嚴經を聞て居られたが、其ごき國師は天童山の密雲和尚ごいふ大徳が金粟山ご云ふ所に居られるご云ふことを聞てうこで参謁して禪要を訪れたが、何分幽玄いことであるから中々わかりがたいこの所に開祖ご密雲和尚がおりますが是は禪學上専門の語でうこで國師は是よ普通の人には分り難いから略します。うこで國師は是より大疑團をたごされて七晝夜ご云ふものは少しも眠らず、専心工夫を凝らされて居りましたが、或夜忽ち窓外に立て思惟三昧に入られて居りますご、一陣の風ふき来て總身毛だち、通身熱汗ながれ廓然ごして大に源底に徹せられたのである。うこで諸の法友

ごと三日を限り宗門頌古三十則と云ふのを御綴りに相なり、方丈に持参して密雲和尚の御眼にかけらるゝと、和尚一々この三十則の頌古に朱點を附られて試験に合格したることを示されたのである。するご徒學の雲水ごもが、之を見て非常に驚愕たのであります。夫は何故如斯に驚愕たかといふに、是までは國師が晩年にして出家せられたのを視て、遅緩しく思ふて、東林生國師御誕のさごにもまた佛ありや、なりと云ふて嘲弄て居たから、今度國師が幽玄な道を理會せられ印可を得られたから大衆のものも皆舌を捲て驚いたといふことでもあります。其後崇禎三年

三月に、御年四十歳にして密雲和尚が福州府の黃檗山に進山せらるゝに従つて檗山に歸らるゝことになりましたが、其後間もなく夏象と云ふ人の請に應じて、獅子岩といふ所に閑居せらるゝ躬となりました。何をいふても深山のここでありますから、晝夜耳にみつるは松風の音、晨昏日に馴るのは庭の雪のみ、黃葉のきを埋め、青苔柱にまごへり、食乏しければ命根をさへ難し、衣袂破るれごも縫によしなしと云ふやうなる極めて枯澹の御境遇にて看經せらるゝこと四年、崇禎六年といふに、費隱和尚と云ふ御方が密雲和尚に更迭て黃檗に入らるゝに付、参謁して

一偈を呈し、以て得法の證を受けられたのであります。其偈に曰く一聲の荼毒聞て皆喪す、徧野彌鏤藏すに所なし、三寸の舌伸ぶ安國の劍、千秋凜々こして霜よりも白しこ、云ふこの偈を作て費隱禪師の禪榻にさゝげられますこ、禪師は逐一これを御點檢にあひなり、早速拂子をもつて之を國師にさづけ得法の信を表せられたのであります。其後崇禎十年十月に黃檗山の請に應じて愈檗山に御入院と定まつたのであります。

却説かうなつて見まするこ、國師の御法身にたいては甚だ御道譽のここで、何にせよ大明四百餘州を

知し召さる、天子の勅願所のここであるから、此所に御赴任ならせらるゝここになれば人爵の上について、最早紫衣以上で、今の日本の門跡や、管長の類は全然段がちがふて居るのであります。然るに國師はかゝる名藍に御棲になるのを甚だ厭はせられ、再三固辭せられたけれども、惘調黙止がたく、止なく御年四十六歳と云ふに、御入院になりましたが、五十三歳まで黃檗山にて道俗のために說法中、日本の後水尾天皇承應三年と云ふに、將軍徳川家綱公が長崎の逸然和尚を以て屢國師を御招待になりましたが、國師は之を再三辭退せられたれども、中々

聞き入れがないので、國師は止なく日本の請に應じられることになりました。依て黄檗の席を開祖の御門弟なる惠門の浦公と云ふのに御譲りにあひなり、愈日本へ向て出帆と云ふここに定りました。うここで預て國師に歸依せる護法の大官居士やら御門弟の大衆やらに告別の意を表せられ、鼓を打て上堂して大衆に示された偈に。老僧無能にして濫りに黄檗を主席と云ふ十年、檀信に負くことあること多し、並に即日行を啓て聊か寸別を叙し以て衆念を慰す、永く行て住らずんば未だあらず、洪波千萬頃を盡す、拈花正脉東に向て開くこと。かう云ふ御叮重なる御言を賜

り、即日行を發して日本に向はれましたが、海上無事にて承應四年七月五日に長崎に御著になり。其から龍溪和尚と云ふ御方の懇請により、間もなく攝州富田の普門寺と云ふに御上りにあひなり其途中、海上の風光を戀はし玉ひて一詩を賦せられた。其詩に、「我は是支那の老比丘、縁に隨ひ化に應じて東土に赴く、杙知る唯江頭の月のみ有て、一夜清光客舟を伴ふ」と云ふのであつた。うここで全年九月五日に大阪に著せられまするご、僧俗が群集して祝國のために開堂を乞ひまするから、國師は一々これに應じられ開堂をされたのであるが。時に板倉周防守重宗及び

諸國の侯伯ごもが競ふて參見し、國師の法語を聞て
贊嘆措かず、まことに靈山の一會に異ならずと云て
歸依渴仰せられ、うこで愈黄檗宗の開創となつたの
であります。

三、黄檗宗の開創及禪師の御僊化

さて萬治元年七月に國師の御門人なる龍溪和尚が
將軍家綱公の意を受けて江戸より歸り開祖を禮して
上意の旨を述べて謂はるゝやう、隱元國師を留めて
祝國のため一宗を開かしめ法を説かしむべし、依て
僧糧として寺領を賜ふと、かう云ふ忝なき御上意で
あつたのである。うこで國師は同年九月六日と云ふ

に富田の普門寺を御出發になり、同く十一月朔日に
將軍家綱公に御相見になるこ、將軍に於ても痛く御
満足の意を以て、優遇至らずと云ふこもなく、開祖
が辭して下向せらるゝに臨み、將軍は親しく黄金た
よび吳服等の珍品若干を下し置かれますると云ふや
うなるこ。夫から十二月八日に至て、京都に入ら
れるこ、京都は淀の城主永井信濃守と云ふ御方の悃
請によりて、説法なされて居りますと、明れば萬治
二年六月に、將軍家より直使を以て今の黄檗宗大本
山の所在地、則ち山城國宇治郡大和田村の中二十萬
坪を下され、伽藍を建立して是を以て祝國福民の場

たらしめんことを傳へられた。うこで國師は直に御門人の惠林禪師と云ふのを關東に差遣され、將軍家より伽藍地を賜はりたる御恩に報答せられた。うこで寛文元年正月に伽藍建立の起工式を擧られたが、開祖はしたしく之に臨で、偈を説てこれを祝し給ひ、支那の黄檗山に擬へて、同く黄檗山萬福寺と命名せられたのである。うこで寛文三年正月十五日に天下泰平國家鎮護のため、開堂説法がありました。偈は、偕て是よりと云ふものは靡然として宗運恰も旭の上るが如く、黄檗の法幢いよく旺盛になり、開祖の徳光和漢に溢れ、貴賤蟻の如くに集り、門前市をなし、

乃ち支那の黄檗山の管長惠門の浦公禪師より、特使を以て支那大官の壽章とよび一山の壽軸を以て國師の盛名を祝せらるゝのみならず、本朝百七代に亘らせらるゝ後水尾天皇は忝けなくも、開祖が三百年來絶て久しき禪法を興隆せらるゝのを聞き召され、勅使を以て法要を問ひ給ひければ、開祖は一々これに奉答があつたので、天皇叡感斜ならず、是より屢王駕を狂げさせられ、禪要を問ひ給ふことあり。國師御年七十歳の冬、禪門大乘戒壇を黄檗山に闡き、天下の大衆のために親しく戒牒を授けらるれば、四海の雲衲開祖の道價を欽て仰望に耐ず、群集してうの

德澤に浴するものは學てかろふべからず。明れば寛
文五年十月後水尾太上法皇より御香たよび黄金等を
下し賜り、また其明年には五色の佛舍利五粒を寶塔
に入れ下したまはつたのである、國師は重々天恩の
忝なきことを思召し、偈を説て之に答禮し給ふたこ
云ふことであります。

國師御年八十二歳の正月元日早旦にたいて、笠を
被り杖を持ち大衆の寮舎を御繞りになり、老僧托鉢
して行脚し去らんご申されますご、國師の侍者をし
て居ります栢岩ご云ふ僧が、國師の御前に進みいで
和尚に一文錢を與へんご白した、するご國師は呵々

ご大笑して去られたのである。斯て二月三日に於て、
後水尾太上法皇はまたもや勅使を以て錦織の觀音の
大像一軸及び名香若干を下し賜はりました。開祖は
偈を書してその重恩を陳謝し給ふ。その偈に曰く、
二十年來行化して東方に寓す、屢洪恩を受けて念し
て忘れず、珍重す上皇壽算を贈し、西來の正法敷揚
によるご、かう云ふ御文章であつた。四月朔日より
開祖少しく御不例に渡られたれば、門人を座下に召
されて宣ふやう、汝等常に法門を以て重しごし道を
以て自ら貴で俗に隨ふごごなかれ、苟も名利に耽り、
自徳を亡し、教誨を守らざるものは我が眷屬にあら

ずこ。恫々ご御弟子に對し將來を御警誠にあひなり、
 四月二日には忝くも後水尾天皇には大光普照國師の
 御震翰を下し賜り、なほ國師の病革り起たざるこ
 を聞しめして宣はく、「國師は日本の寶なり、若し命
 替るものならば朕が躬を以て之に代らん」ごいごも
 畏き御言ばを賜つた。國師は是の如き至尊より優渥
 なる御令詞を賜り感佩措かず、「西來萬里の老桑門、
 地を賜ひ宗を開て國恩に感ず、今日功圓にして恭し
 く謝を致す、河山位鎮め永く存す」この偈を書て奏
 奮を申されたのであります。斯て開祖は三日の早天
 にたいして左右につげて宣はく、今日は皆遠くはなる

、ここなかれ我が時節迫れりこ。左右愕然として筆
 を進めて遺偈を請ふ、國師筆を奮て大に書して曰く。
 「西來柳栗振雄風幻出礫山不宰功今日身心俱放下頓超
 法界一眞空」ご書し筆を擲て泰然として遷化り給ふ。
 是實に寛文十三年四月三日未の時であつたのである。
 斯て三日の間は諸人の瞻拜をゆるし、三日終て御遺
 體を龕にをさめ、百日中この龕を方丈に安置し、日
 々門人等の續經たゆることなく、斯て七月十五日に
 至りて、龕を壽塔に徙し、明くれば延寶三年四月三
 日にいたり、御遺命により棺を塔下に納めたのであ
 ります。偕て國師嗣法の門人二十三人剃髮の弟子五

十餘人々の外護法宰官居士をはじめと致し、天下の優婆塞優婆夷が國師に歸依して弟子の禮をさるもの支那と日本とを問はずの數は擧てがりふることには出來ぬのである。國師始め二十九歳にして出家し、三十五にして傳法し、四十六歳にして支那の黃檗に開堂し、五十三にして同國福嚴寺に住職せられ、五十四歳にて龍泉寺に開法し、五十六にして再び支那の黃檗に座主となり、六十三歳にして日本へ渡來し、長崎の興福崇福の兩寺に開堂し、六十四歳にして攝州富田の普門寺に演法し、七十歳にして新に宇治の黃檗を開きたのである。私は潜に思ひますが、我が

開祖が日本へ御來朝になつた以來たゞ黃檗の佛法のためのみにと多大の効績があるばかりでなく、三百年來たゞて久しき佛法の福音を、社會に傳播するの能力なかりし各宗が、わが開祖の門風のために痛く刺撃せられ、漸く翻然覺醒しきたり、其より各宗の勃興となり。尋で名僧知識の輩出となり、明治維新の革命となりましたのです。此點から考へますと、若し當時我が開祖にして日本に御來朝がなかつたこととすすれば、當時死に瀕せる各宗が、ごうして今日の如き活動的地位を保つことが出來まじやうと、到底できぬことは必然です、之に依て考へれば、我開

祖は只黄檗の開宗者たるのみならず、亦我が日本各宗の復活者たることは否定すべからざる事實であらふと思ふ。この故に和漢兩國の間に跨り、八座道場に説法せられ、遂に八十二歳の御高齡を以て遷化し給ふ、我が開祖隱元國師は、唯に黄檗一宗の開闢者たるのみならず、我が日本佛教各宗の原動者として、此の最大偉人の高德を謳歌せねばなりません。このゆるゑに忝けなくも、本朝は百七代に亘らせ給ふ後水尾天皇は、此末法の燈明者たる我が祖の終焉を痛ませられ、親しく震翰を染めさせられて、「朕聞臨濟之道偏行天下至天童雙徑光輝益盛唯我日域久乏宗匠幸

黄檗隱元琦和尚受請東來重立綱宗開揚濟道大光於國功不可磨朕屢沾法乳簡在朕心故特大光普照國師號以旌厥德欽哉故諭寬文十三年四月二日」この有がたき御宣示を下し賜はり、亦享保七年三月に靈元天皇は我が開祖の道譽の宏大なるを追慕し給ひて、謚號を佛慈廣鑑國師と追贈しての勅書に曰く「朕以支那宗匠斷際後身德感神物法囑王臣黃檗開山大光普照國師隱元琦老和尚乃其人也曾應請東渡三百年來已滅之宗燈重揭起所以先皇歸崇寵榮優渥朕亦慮深有夙緣繼其聖旨沐于師風不以爲少」ご宣詔し給ひ、亦明和九年三月に後桃園天皇は吾が開祖に勅して徑山首出

國師と加號して、其要に宣く黃檗隱元老和尚嘗方元
 和天皇時東來茲賜地開山禪道之盛莫若其人朕亦深追
 慕其風云云宣ひ、又文政五年三月仁孝天皇は開祖
 の高德を追讃して覺性圓明國師と宣下し給ふ、依て
 後世吾が開祖を四朝の帝師と尊重して其遺徳を追慕
 讚嘆あるばされたのも決して故なきにあらずと言は
 ねばなりませぬ。

第三章 宗要大意

是から吾が黃檗宗の教義を大要御話し致さふと思
 ひます、何分この禪宗は古來より佛教中の最上乘の

教としてあつて、他宗の如く鈍根下劣のものを對機
 として之を救ふを目的として居るのでなく、又權便
 作略を以て、人を導くこと云ふことがなき故、教乘に
 よつて修養いたされて居る人々には、甚だこの門に
 は入りがたい様に思ふ。先づ私が禪宗本來の面目の
 上より穿て云ふて見れば、禪宗が人を化導するの方
 法は上根上智寧ろ大器の人物を養成するのを目的と
 して居るのであります。かるが故にこの禪宗の教義
 は一班普通の人には甚だ眼に映じ難いのみならず、
 通例の佛學者と雖も容易にその門庭を窺ふことはで
 きませぬ。うんならば鈍根劣氣のものは其教化に洩

るか云ふに、決してさうではないのである。我が宗には適化無法と云ふことがあつて、他宗の如く所依の經典を立て、これに依て成佛得脱すること云ふことがないのである、唯だ人々各自の氣質に應同してゆくので、之を一超直入如來地と申して、鈍根下劣のものも上根上智のものも共にこの如來地と云ふ典型の中に入れて方便をからず、所依の經典を用ひず、直に如來同格の位に到らしむるのを目的として居るのであるから、是を一面より見れば、甚だ禪門の奥庭には入り難いやうに思はるれども、又一方面より觀察すれば他宗門より甚だ入り易いやうに思ふ。何

こなれば、我が宗は超佛越祖の法にて他門の如く方便をからず、又一部の經典を用ひず、直に人々各自の氣質を捕へ來り見性成佛せしむるので、元來方便をもちひ、作略をかるのは、人々を導いて眞理の奥庭にいたるの手段方法に外ならぬのでありますから、矢張成佛といふ眞理の目的地まで到るには、餘程の徑路を迂回してゆかねばならぬのですから、吾が宗から見ますれば却て他宗門には入り難いやうに思ひます。之に反して我が宗は決して方便作略を用ひぬのであるから。岐路に迷ひ、宗義の攪亂を見るやうなることはありませぬ。此點から云ひますれば日本

佛教各宗中、獨り我が黃檗宗より入り易い宗門は先
 づないと言ふてもよからふと思ひます。
 以上述べたのは、我宗に於ける入門難易の判釋で
 あるが、是より愈本論にうつり我宗の宗要大意を御
 話し致さふと思ひます。
 元來上述の如く、他宗門には一部の經論を以て所
 依こいたし、其經論に基き、開宗せられて居ります
 が、我が宗は之と異なり、釋尊所説の一經一論を以
 て所依こせず、一切佛祖の經論を以て悉く我が藥籠
 中に入れて、この一切の大藏經を以て我が宗の所依
 こするので、他宗の如く區々たる一部の經論を以て

立教の基礎とするが如きは我が宗には断じていたさ
 ぬのである。故に佛説の言語を以て宗義を談ぜず、
 直に佛の心を指して悟入する邊から、佛語心を以て
 宗とし、本性空に達すれば必竟一法の門戸なきここ
 ろから、無門を以て法門こいたして居るのでありま
 す。元來佛教に於て門戸を立るが如きは、必竟兒を
 憐で醜を忘るゝ底の假りの方便にして、自己の本性
 を徹見せば、固より佛法々中に門戸のあるべき筈な
 く、夫故我が宗には假りの門戸を立てず、直に人々
 の心をさして性を見、道を得せしむるのであります。
 此故に當宗には文に依て義を解すれば三世佛の宛な

りごも申してありまして、言語文字によつて、我が宗の本意を領得すること能はざる旨を表彰してあるのであります。亦た或る反面には、經の一字を離るれば魔説に如同すごもあつて、本宗には別に教乘を立てぬけれども、又經論をもつて、菩提の信縁とするのを厭ひませぬ。尙ほ言を替て白しますれば、我が宗には全く文字言句を排して毫も之に依らずといふのではありませぬ、只だ禪學者が言句文字の糟粕のみに拘泥して、見性の本意を忘るゝのを誡めたのである。この故に我が宗には文字を立てず、教の外に別に傳へるのを以て宗要こいたし、直に人心を指

して性を見せしめ、成佛の素懷を遂げしむるのを以て安心の決著點として居ります。然らばこの安心こ云ふは、如何したならば得らるべきやと云ふに、是は矢張禪定に入りて、坐禪工夫の力によらなければならぬのである。

さて、この坐禪工夫するに付て、色々な階級があります。先づざつと擧げますれば、異計を帶て上天道の樂を欣び、下衆惡の苦を厭ふて、修する所のものを名けて外道禪と稱し、また原因結果の理を信じて、善を欣び惡を厭ひて、修する所のものを名けて凡夫禪と云ひ、我空偏眞の理を悟て、修するもの

を小乘禪と云ひ、また我もなく、法もなく二つとも、空なる所に顯はるゝ眞理を悟るのを大乘禪といたします。若し頓に自心本來清淨にして、無漏の智性を具足し、之に依て修するものは如來清淨禪と申します。抑も我が禪宗にたいて、如來禪と、祖師禪との二派の分るゝ所以のものは、祖師禪は教外別傳不立文字を旨として、心を以て心に傳ふるのを祖師禪ともうし、又如來禪は、佛説の經論を以て、佛性とか涅槃とかの義を談し、言教を以て導くものを如來禪と申して居るのであるが、もごより我が禪宗の本體の上からいひますれば、如來禪とか、祖師禪とかの

階級はなき筈のものであるか、併し昔支那にたいて、南頓北漸に分れたる中、南宗の機は利根にして言下に大悟せしゆるゑ、之を祖師禪と名け、北宗の禪は、劣機にして如來の言教によらなければ領悟すること能はざるを以て、如來禪と名けたのであります。去ごも、禪宗本來の面目より達觀し來れば、如來禪の外に、祖師禪なく、また祖師禪の外に、如來禪なければ、この間に毫釐も差あらば、天地はるかに隔るの觀があります。依て今、わかり易く、この祖師如來の兩禪を燈光に喩ふれば、祖師禪は燈の如く、如來禪は、るの光の如くであります。祖師禪の燈あ

ればころ、即ち如來禪の光りありて、若し祖師禪の燈がなければ、從て如來禪の光もありませぬ、うれで燈は光の體であるし、光は乃ち燈の作用であります。今名は二つあれども、其實は本同一であるのです。故によく、是で考へなければならぬことは、本來我が宗には、頓漸の法二つあるのでは無く、只人の性質に利鈍があるので、うちて鈍者は漸く修行して悟り、智者は修行を経ずして頓に本心を悟るのであります。然ども智愚利鈍を撰ばず、均しく自己の本性を見て悟りを開きたる曉にたいは、祖師禪の頓さか、如來禪の漸さかの差別は決してないのであ

る。故に祖師禪、如來禪の頓漸の名は必竟參禪辨道をして見性するまでの假名に過ぎぬのであります。この故に、如來禪祖師禪等の區別をうの間に立てるのは、我が宗の面目に契はぬものご心得ねばなりません。せぬ。うちて終りに臨んで、吾宗の要義を概括して見れば、我が宗は前陳の如く無門を以て法門とするのであるから、何所から入てゆかねば成佛はできぬご窮屈なる規定はないので、古人も佛の相好を拜て悟りを開かれたる人もあれば、又法華經を讀で悟た人もありまするし、又諸葛孔明の出師の表を讀で悟た人もありまするので、決して我が宗には門戸は

立てぬ、只各が入りたいたい所からいるべしで、禪宗の門徒と成たからこて穴勝に坐禪せねば成佛はできぬこは、きまつて居らぬのであります。

此故に禪宗の禪と云ふは、禪定の禪にあらずと古人も言ふて居られるが、必ず坐禪するからこて、禪宗と名けた譯ではなく、禪は心の異名なりとあつて、各の本具の心のこころであります。かるが故に各が自己の一心をさへ領得ができれば、夫が取りも直さず我が宗の安心であります。併し焦、秩序のなき茫漠こしたこころばかり言ふて居ては、初心のものには分りにくいであらうと云ふ所から、古人が親切に門戸

のなき所に、假りに古則と云ふ一つの門戸を御立になつて、此門によつて悟りを開くの龜鑑とせられたのであります。故に各がたも、現在わか宗に歸依してたる人は申すまでもなく、又將來わが宗の門徒たらんとする人々は、上來の要義を密細に點檢し來て、佛祖の妙旨に密符せられんを祈るわけであります。以上略して我が宗の要義を説き明したから、是より直に次に徙つて、參禪の要路と云ふのを御相談に及ばふと思ふのであります。

第四章 參禪の要路

抑參禪の禪とは、靜慮にて、靜かに慮るの義で、心を一所に制止することでありませぬ。凡て何事を致すに付ても、浮薄の考では何ごとも成就するものにはありませぬ。必ず靜思熟慮しなければなりませぬ。殊に佛法の眞理を究め、轉迷開悟しやうご云ふに付けては、きつご心を定めて外に散亂せぬ様にせねばなりませぬ、俗に之を一心不亂といひまするが、これに反對するのが散亂です、我が宗にはこの靜思熟考の方法を坐禪工夫ご申します。元來當宗には本來

無一物の法にて、煩惱ごか、菩提ごか、いや生死ごか、涅槃ごか、云ふやうなる閑名目をガラリご打すて、元の本心に立ちかへるのを回光返照ごまうします。何でもこの回光返照を幾たびも、繰返し、て、思念工夫をいたして居りますれば、惠の發現に到ります。この惠といふのは智慧のことで、此智慧も靈光無碍の智慧で、世間通途の智慧ご稱するものは格別であります。古人も無礙清淨の惠は、禪定によつて生すご仰せられてあります、是れには普通の佛法でも三學ご云ふことは談して居りますが、此三學ご白すは、戒定惠の三つで、戒は戒律にて、

身の悪行を制し、定は禪定にて、心の散亂を治め、
 惠は智惠のここで、迷ひを去りて悟りをひらかしむ
 るここでありませぬ。必竟するに、縦令佛法は博く佛
 理は深くとも、この戒定惠の三要素を出でぬのであ
 りませぬ。うここで定惠の二つは其體一にして二つある
 のではありませぬ、故に六祖壇經にいふ書にも、定
 は是れ惠の體、惠は是れ定の用、惠の時に即して定、
 惠にありて、定のごきに即して惠、定にあり、若し
 この義を識らば即ち是れ定惠等學なりとあるし、又
 同書に、一念を廻らして善なれば智惠すなはち生ず、
 此はこれ自性の化身佛なり、喩へば一燈のよく千年

の暗を除くが如く、一智よく萬年の愚を滅すこあつ
 て、禪定の力に依て智惠をいたし、智惠の劍を以て、
 紛糾せる煩惱妄想の賊を退治するのであります。故
 に我が宗に談ずるところの見性の端的も、畢竟する
 に靈光無碍の智惠の發現に外ならぬのであります。
 然らば如何したならば無礙清淨の惠に體達するので
 あらうかといふに、うれは前にも言ふた通り、禪定
 の力によらねばならぬのです。

さて、うんならば禪定によつて大悟徹底し、大安
 樂の境界にいたるまでの道程は如何するのであるか
 と云ふに、是には坐禪工夫するの坐相と云ふことが

ある、この坐相のここを一寸話して置けばよいが、
今は何分りの餘裕がないから、このことは他日に譲
るここへして置いて、直にその坐禪と云ふここから、
始めて正念工夫するの順序を御話し致して見たいと
思ふ。偕てその坐禪と云ふことは、大鑑惠能禪師の
六祖壇經の中に、此の法門の中に障もなく、礙もな
く、外一切善惡の境界に於て、心念起らざるを名け
て坐とす、内に本性を見て亂れざるを禪とすこと
申されてありますが、之によつて見ますれば、坐禪
と云ふのは、只だ無意味にダツト坐りこんで居るば
かりが坐禪ではないので、坐禪と云ふ本能から云ふ

て見れば、坐する當體が正念工夫にいり、生はこれ
如何、死はこれ如何と大疑團を起し、自己撰擇の料
見を交へず、一心不亂に念頭を向上の一路に捧げて
ゆくのである。するに古人の申されてゐる、打成一
片の境界にいたるので、この打成一片の境界をまだ
くやり通して往くこと不起一念の境に體達するので
ある、この境界と云ふのも諸縁を放棄し、萬事を休
息するので、この境界を所謂六祖壇經に、外一切善
惡の境界に於て心念起らず、内に本性を見ること申さ
れたることで、是をまた、身心脱落とも、脱體無念
とも申して、名は替れとも同じことであるが、まだ

くこの境界に屈著して居てはつまらぬ、曹洞宗の
 道元禪師も、生を明め、死を明むるは佛家一大事の
 因縁なりと白されて居るが、この佛家一大事の因縁
 をよくく究明して往くので、生死岸頭にたいて、
 大自在を得る底にいたるまでには、幾多の煩惱の大
 敵と戦ひ、たこひ粉骨摧身するともこの生死の大難
 關を踏破せずんば死すとも瞑せずと誓ひ、勇猛精進
 の心を以て、蕩直に進んでゆくのである。この心を
 馬鳴菩薩の起信論と云ふに、勇猛の衆生のためには
 成佛一念にあり、懈怠の衆生のためには涅槃三祇に
 亘ると説せられてあります。この涅槃といふことは

滅度と云ふことで、譯して見ますれば、大患永くつ
 きて迷を越へると云ふやうなる意味であります。此
 御言は、禪學者たるものは精神を純一無雜にふり向
 け、猛く精彩をつけ、片時も間斷なく勵み進みたら
 んには、忽ち自心の源底に徹し、生死の命根を截斷
 するの大開悟あらんこの御言であります。偕てかや
 うに申すこ、各方は吾々如き塵勞中にあつて、世務
 に關するものは如何してうんなに諸縁を放捨し、萬
 事を休息してまで専ら坐禪工夫をすることができ
 るものか、なごと云ふ人もあらうが、成程續紛たる世
 務をいごなむ人は、一切萬事を抛つて、たゞ坐禪工

夫ばかり致してたることは出来なからうが、去りな
 がら、坐禪云ふものは、必ずしも斯る窮屈なるこ
 こを強てせよと勧めたるものでないのです。此消息
 を臨濟の白隠禪師は遠羅天釜云ふ書に、この故に
 祖師大悲善巧ありて、この正念工夫不斷坐禪の正路
 を指す、諸侯は朝勤國務の上、士人は射御書數の上、
 農民は耕耘犁鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は
 紡績機織の上、若し是れ正念工夫あらば、直に是れ
 諸聖の大禪定なりと仰せられてあります。成るほ
 ごこの通りで、坐禪するからごて、必ずしも僻遠の
 ごころに隠遁て世務を擲ち、萬事を休息し、徒に枯

坐黙照せよと云ふものではないのです、只各自の業
 務を管みつ、坐禪觀法するので、この心を法華經の
 中にも、資生産業は皆實相と違背せずと仰せられて
 あります。又白隠禪師も遠羅天釜に、洵に知る
 得力の淺深は進趣の當否によることを、工夫若し一
 人ご萬人ご戦ふ底の氣力あらば、豈にうれ林下ご室
 家ごを擇ばんや、若しうれ見道は特り林下の人のみ
 にありごいは、民の父母たるご、人の臣たるご、
 人の子たるごは望みをろの間に絶たん、縦ひ林下に
 ありごも道業密ならず、志念純ならずんば何ろ室家
 に異ならん、縦ひまた室家にありごも、志願濃厚に、

操履堅實ならば何ぞ林下に異ならんや、故に此正念工夫は、不斷坐禪に超へたることなしと説せられて居ります。この故に所謂坐禪工夫なるものが、果して世業を妨げ、民治をさゝふる事がありとすれば、國衰へ民疲れ、衆民必ず恨みて、禪は是れ極めて不祥の大兆なりと云ふでありまじやうが、私は古の祖師方の行實を見まするに、皆坐禪工夫しつゝ、汲水採蔬の業、作務普請の世務をいこなみつゝ、専ら動中の得力をもこめられて居ります。是を動中の工夫、不斷坐禪の法と申すのであります。この故に古人も坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、

號哭悲泣の室、管絃歌舞の席に入りて、少しも安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭となして工夫すべしと仰せられてあります。今こゝろみに、古の祖師方が之を實地に應用せられたる二三の活劇を擧げて見やうと思ふ。そこで前節中、隱元國師略歴中にもまうし置いた通り、第二章二部參觀隱元禪師が未だ密雲和尚の參徒たりしときに、嘗て密雲和尚より、「巴掌」と云ふ公案を授けられ、擬疑決せざるもの七晝夜といふ間は、少しも坐することを得ず、また臥することをもせられず、經行坐臥やすからず、氣息噴々として平目にして行くに、千人の中に一人あ

ることを知らず、亦た我身あることをも見ず、翌日の朝、維那役僧堂と云ふ役僧が一聲の磬を鳴らされること、忽ち吾射のこゝにあるを覺られたと云ふことである。うこで臆外に立てたられますこと、忽ち一陣の風が吹て来たが、うの時師の射は寒毛卓立して通身熱汗ながる、是に於て忽ち大に源底に徹し、便ち知る、三世の諸佛歴代の祖師、情と無情とここへく一毫頭にあつて了々分明なることを、人のために玄談を舉示すべからず、自證して則ち知る、師の心中甚だ憚ぶこと、さあ恚なつてこぬと駄目です、古人も十二時中行く底是れ何物ぞ、坐する底是れ何物ぞ、

作す底是れ何物ぞ、心是れ何物ぞ、理はつき究め去り、事につき究め來りて、只管に疑ひ勇猛に進んで退屈せずんば大疑現前して大歡喜の眉を開かん説かれてある。

又卮庵法語といふ書にかう云ふことが書き残されてある、昔し蒙山の異禪師と云ふは、痢病を憂ひて九死一生のとき、苦痛と戦ひ坐禪せり、暫くありて腹大に鳴動し、痢病即刻に平愈して大に悟入せり、又予が朋友に大傷寒を惱みて絶食すること八日、大熱にて舌も焦け、晝夜の別もなく苦みけるが、師家に呵嘖せられて未悟を耻ぢ、前非をしりて忽ち大誓

を發して必死の念に住し、臥具をたゝみ、齒を喰ひ
 し、内外清涼身心歡喜に入り、本來不可得を證すこ
 予もまた二十八歳のとき諍論のこゝあり、毒藥の害
 に會ふ、全身痛焼して暫時の間に手脚すべて黒色こ
 なる、其苦惱の劇切なるこゝ言を以て宣ふべからず、
 無間焦熱の苦もこの上はあるまじと思はれたり、時
 に大懺悔を發す、抑十七歳を初發心として正師を尋
 ね叢林に入りて參禪辯道し、水に立ち雪に坐して脇
 を席につけず、夙夜に忘却せざるこゝ十年餘、生死
 透脱して大事を得たりと思へり、今此毒藥に苦めら

れて轉所自由ならざるこゝかはこゝ、大勇猛を發し劇
 苦に戰ひて趺坐す、この時未だ初夜を打せず、正念
 調息して四大分離觀に入る、氣息忽ち滅盡して性相
 にも忘却して正念相續す、時に鐘聲の來りて虚空
 に響くあり、身體を動搖し手脚を屈伸するに尋常こ
 大に異なり、前來の苦痛昨夢の如く身心ともに大慶
 快を生ず、暫くして吐瀉一時に來る、恰も臍腑皆つ
 きて皮骨連立するが如し、死中に活を得るこゝ毒藥
 變じて甘露の妙藥となるこゝ、白してあります。偕て
 ろの他にも昔の人にて勇猛菩薩と云ふは、禁誡を犯
 して苦痛の中に大誓を發し、頓に無生法忍を悟り、

雲門大師は折脚せられて大悟し、嵯川新左衛門は喧嘩の席にて省悟し、將軍足利尊氏は陣中にたいて安心されたるが如き、今一々これを擧ぐるには及びませぬが、偕て恚まうすこ、各方にはるれば古の大徳がたの修行であるし、之を今時の如き根氣のすたれたる社會に於て、用ひよこ言てもうれば到底不可能のここに囁しはせぬかこの疑念もあらうが。成るほご聞て見れば最も様の聞ゆるが併し、是れ全く信心起らず、道念の薄きがいたす所で、噲へばこゝに一人の男が有たこして、うの男が往來絡繹たる巷、稠人廣衆の中にたいて、鉛て金錢を遺失したこ假定

するこしましやう、縦ひ人目しげしこて、其儘に棄て置くこいふこはないでしやう。物さわがしこて尋ずるに置くのでしやうか、決して尋ずるにほつて置くやうな氣遣ひはないでしやう、多くの人を押わけても一回たづね出して、我が手に入れざる限りは決して安心は致すまいと思ひます。

シテ見れば、塵務しげしこて參禪を怠り、世事煩劇こて工夫を廢せん人々は諸佛無上の妙道を以て、彼の金錢ほごには思はざるものこ言はねばなりませぬ、然らば塵務の上、世波の間に處して、かの黄金を遺失した人の如く專一に工夫の功をつんだらば、

誰でも歡喜の眉を開かずには居られないので、必ず
 金剛不壞の正體に到達する期があるのです。此意を
 古徳も唯だ正念工夫を押し立て、無二無三に進めば、
 苦も妄念も一團の精神となり、一色の辯道となる、
 若し正念工夫を失うときは、妄念邪氣のために、
 今生の身心を責め苦めらるゝのみならず、未來永劫
 の生死を相續して、大苦を受ること古今擧て計り難
 しと説き。また若し人精神を憤起し、目を張り牙關
 を咬定し、即今見聞覺知の性、何れの所にかある、
 是れ青黃赤白なりや、内外中間にありや、是非々々
 見こけずんば置くまじろと勵み進まんとき、妄想

競ひ起ること潮の湧くが如けん、此時少しも屈せず、
 單々に進みて一人と萬人と戦ふが如くし去らば、通
 身汗ながれて黑暗萬丈の大深坑に落いるが如く、身
 心ともに打失して、呼吸の氣息もまた泯絶し去らん、
 この時に當りて、忽然として平生の疑團を捨て、大悟
 決定すること睡夢の初めて醒るがごとく、豈に幾多
 の時日をふるに及ばんやと説かせられて居ります。
 却説以上略して參禪の要路をはなして見ましたが、
 凡て坐禪の要術と申すものは、恰ご人の水を呑で、
 冷暖自知するが如くもので、上來にも屢申し置いた通
 り、言句文字のよく其妙味をいひ顯はすことこの出来

ぬものでありますから、古人も密は却て汝が邊にあり、こ仰せられたるが如く、此上は各方が實地につき、綿々密々に工夫を凝らして見より外、別に徑捷はないのであります、依て是より話頭を展開して直に安心の秘訣にうつるここに致します。

第五章 安心の秘訣

却説この吾が宗の安心といふのは別の仔細あるのではない、只だ前にもいふた通り、參禪辨道の功をつみ、其の功に依つて平生の疑團が豁然として解けたとき、一種實に云ふべからざる歡喜の念が浮んで

くるのである、この大歡喜の生ずるのは、全く煩惱妄想の大敵と戦ひ、煩悶苦絶の結果大解脱をうるので、是を曹洞宗の瑩山和尚は、坐禪用心記の中に、迷雲收りはれて、心月あらたに明かなりと申されてある。此迷雲と云ふのは、煩惱妄想のことで、吾々御互が、淺はかなる量見より、種々なる迷を起して居たが、この參禪辨道の効によつて般若の智慧を生じ、この般若の智慧を以て、たゞちに煩惱の迷雲を截断して見れば、心月と云ふ、大安樂の月即ち自己の本性が忽然として現前するのである。之を本地の風光を顯はすとも、心地を開明することもあつて、名

は替れども同じことであります。偕て此に就て吾宗には達摩安心と云ふところがある、それは昔し、我が元祖達摩圓覺大師が、印度より支那に渡りて、魏の國の少林寺と云ふ御寺に御出でになつて、九年と云ふ間坐禪觀法いたされて居るご、二祖の慧可大師と云ふ御方が遣てきて、達摩大師に向て白されるには、師よ願くは我がために安心し玉へ。ごうろ私へ安心の旨を御授けくださいと乞はれた、するご大師は取敢ず、心を持ち來れ汝がために安心せしめんご御答へになつた。先づこの譯はかうである、御前はしきりに安心々々ご云ふが、ごの心ごい

ふものは何所にあるか、先づごの心ご云ふものを一つごに持て參れ、直に安心をさせてやる程にご申された。茲が同じ佛法でも我宗は餘程他宗と異なる所で、ごの教化の峻嚴なるごは到底想像の外であります、永明の壽禪師と云ふ御方も、心に心相なきは是れ安心なりご申されたが、先づ安心を得やうご思へば、身心ごにも脱落して、本來無一物になつてしまはねばならぬ。彼の他力宗の安心でも、蓮如上人が諸の雜行雜修自力の心をふりすてご白せし如く、この自力の分別が極よくないのであります。この自力ごまうすは凡夫の論量で、自己に於て大安心

を得やうと思へは、この自力の論量を超過し、一切分別の心をはなれ、本来無一物の無我の境界に立ち入らねばならぬのであります。この境界にいたるのを脱體無念とも、惡智惡覺を蕩盡するとも云ふのであります。

さて憇云ふ譯であるから、うこで二祖慧可大師は、達摩大師に對して、心を覓るに不可得なりと云はれた。するに達摩大師は、汝がために安心し竟れりと云はれたが。この不可得の心にならねば、佛智見に悟入することは到底できないのである。前にもいふて置た如く、吾々この思慮分別するの念と云ふもの

は、元と邪念にして、直に悪い方へ往きたがるゆゑ、凡て邪念の生ずる心相を閉塞してしまひ、無念にならねばならぬ、儲てかう云ふと各方は、禪宗の安心と申すものは、何でも無心になつて只だ空々寂々たる境界に入るのが吾が禪宗の安心でもあるかの如く思ふ人もあらうが、決してうう云ふ譯のものではないのである、唯だ即今各が持合せの凡見を打破するのである。各がこの凡見を打破してしまひさへすれば、聊かも曇りのない清淨無垢な自性の本心が現はれてくるのである。之を古人も風碧落を吹く、浮雲つき、月青山に登る、玉一團と中された、此御言葉は、自

曰の未證より出づる心念はみな雑念であるから、この雑念を振りすてさへすれば煩惱の浮雲がこれてしまひ、皎潔たる玉のやうなる心月が忽然と念頭に顯はれてくるこの御意であります。

元來よく考へて見れば、今御互の心云ふものは皆この社會に出て來てから色々な垢を付けて參たもので、其垢云ふのは外ではない、生を喜び、死を怖るくのであるが、元來この佛教を信ずる上からは生死不二と悟で、生をよるこび死を厭ふが如き卑劣な根性をすつかり揮りすて、しまひ、確固不拔の精神にならねばなりません。元來銘々は生れるこきに自

分から生れやうと思ふて生れて來たものでもないから、生れて來た云ふ代呂物はもこよりない筈である。又一度も死で見た試もなからうから、死で先へ行く云ふ代呂物は元よりない筈である、斯う考へて見るのである、すれば御互には先天的に生さるふ觀念も、死云ふ觀念も本來なきもので皆銘々が跡から附けた分別の垢である云ふことを自覺されるのである、これを御經の中に、心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す説である如く。

是が前段申したる二祖慧可大師の不可得の御安心の所で、この二祖の御安心は無念を以て宗體として居

るのであるが、斯の無念と云ふは先づ父母未生以前の
 心にて、吾々がこの娑婆世界へ生れてこない前の
 心であること云ふことを思はなければならぬ。うれで
 銘々が平生見聞覺知する所色々宇宙の道理と云ふも
 のは皆この娑婆世界へ生れて来てから始めて感覺し
 たることで、これが固執して迷情となつて来て居る
 のである、此故に經にも一切衆生ことごとく如來の
 智惠徳相を具足す、只だ妄想執著のために見るここ
 能はずと説てあつて斯の迷ひの五官で見聞した雜業
 雜念をさつぱりと揮りすて、原の本心に立ちかへ
 つて見るのである。すれば忽然として法身無相の寂

光土が顯はれ、夫より報身の果報土に遊び、應化の
 身を現はし、一切衆生を濟度するここが出来るので
 あります。是を我が宗の教外別傳の安心といふので
 ある。然らばこの御安心と云ふのは長くも釋尊より
 直に吾が開山國師へ御傳へなされたもので、聊かも
 方便や隨機の説でなく、實に吾が宗の骨髓とする所
 で、これを外にしては決して吾宗には成佛の直路は
 ないのである。

偕て、行者が斯の如く、吾が宗の安心を戴てみれば、
 是れ全く佛力回施の安心であるから、常に報恩
 謝徳の念に住し、佛祖のためには身命を惜まず、力

を教法の弘傳に盡し、平生菩薩の悲願をたこして、
如來佛勅の禁誡に背かぬ様、何れも心得らるゝが吾
が門徒たるものゝ所詮であります。

黃檗之由來終

明治四十五年四月一日印刷
明治四十五年四月三日發行

正價金貳拾錢

著 者 野 崎 鐵 文

鳥取縣八頭郡小畑村字岩淵村第九番地士族

發 行 者 淺 野 眞 成

大阪市北區北野免我野町千十四番屋敷平民

印 刷 者 角 倉 秀 道

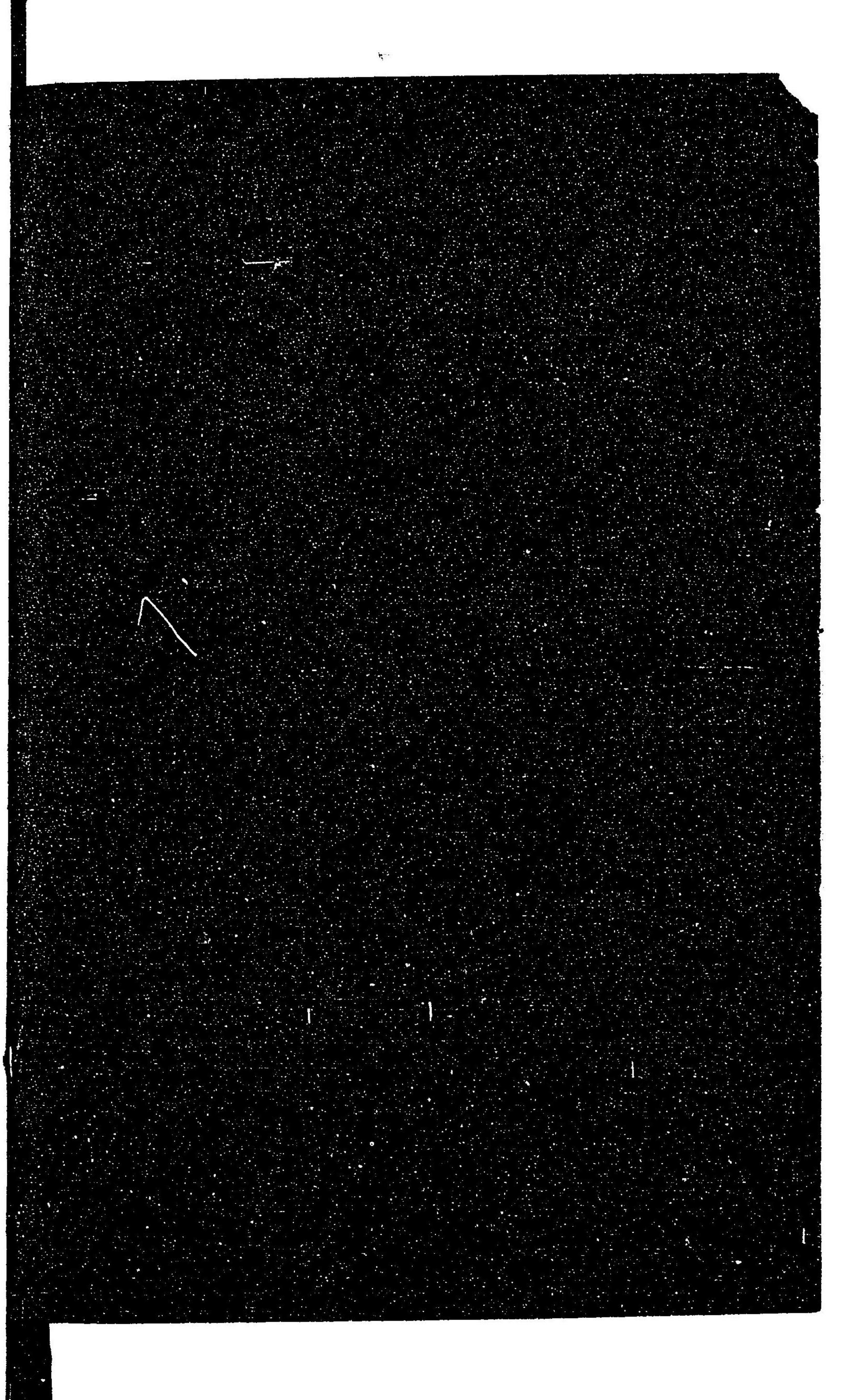
京都市下京區中珠數屋町東洞院東入廿八隣町三十六番地

發 行 所 曙 驢 眼 出 版 部

京都府宇治郡宇治村黃檗山内

複製 不許

269
4
218



019370-000-2

特18-41

黄檗之由来

野崎 鉄文/著

M45.4

ABG-0062

